

チェンマイ / シアトル / ラオス / 神戸

Y M C A

第 2 3 回タイワークキャンプ



2006年3月14日～26日

タイ・チェンマイ ～

チェンマイ県パ・モーン村

～ バンコク

1. 神戸YMCA国際活動について

1) 地球的視野に立ち、平和と公正を求める活動や国際協力事業を行います。

2) 開発教育を推進します。

「開発教育とは開発途上国の現状とその背景にある構造的な不正を知り、その解決のために私たち自身の生活を見直し、積極的に行動する人間を育成することを目的とする教育。」

3) 国際協力募金運動を展開します。

4) アジア・アフリカ諸国への指導者の派遣と研修受け入れ

5) パートナーYMCA（姉妹兄弟YMCA締結）との交流と協力

シアトル（アメリカ）、チェンマイ（タイ）、高雄（台湾）、大田・水原（韓国）、天津（中国）

6) リンケージYMCA（プログラム交流）との交流と協力

スポケーン、ティラムク（アメリカ）、ブリスベン（オーストラリア）

7) カウンターパートYMCA（調査研究対象YMCA）との交流と協力

スリランカ、ベトナム

2. 第23回ワークキャンプの目的

場所： 3月14日～24日：チェンマイYMCAおよびパ・モーン村

タイ国チェンマイ県北西に位置する「ドイ・インタノン国立公園」(タイでも一番標高の高い山「インタノン山：標高2556m」を有する国立公園で、環境を守るため立ち入りがチェックされている)内にあるパ・モーン村(標高1800m、集落は大きく分けて3つに分かれるが一番奥の村には電気はきていない、人口1394名、村人はすべて「カレン族(少数民族)」であり、タイにはめずらしくこの村の40%はキリスト教徒)にあるピヨムルリ・パ・モーン小学校がワーク地。村の家庭にホームステイさせていただき、毎日、学校へ通いました。

3月24日25日：バンコック市内(スラム街、ストリート)と私設の児童擁護私設見学バンコック市内で、港湾での日雇い労働者が多く住むスラム街、また世界でも有名な「パッポン」「タニヤ」などの売春ストリートを見学。また家庭の様々な事情で送致されてきた子どもたちを預かる孤児院見学を行いました。



- 目的： 1) 開発教育... 東南アジアの国との関係、構造的な格差、日本人としてのありようを見つめ、気づきを得て、今後の行動への指針とします。
- 2) 国際理解... 互いの文化や習慣の違いと共通点を知り、相互理解を深めます。
- 3) 国際交流... 国を超えて顔と顔の見える人間同士の関係をつくり、精神的にまた具体的に平和のために協力し合える礎を築きます。
- 4) 国際奉仕... タイの農村コミュニティに必要な施設を、現地の人との協力のもとに作り上げるボランティア活動を行います。
- 5) 課題発見... フィールドワークを通じ、グローバルに課題となっているさまざまな視点を発見します。
- 内容： 1) 学生や村人の学びの場となる「文化と教育を広げるセンター」を作ります。
- 2) タイ都市部の学生・シアトル・ラオスからの参加者との異文化交流を通し交流関係を強めます。
- 3) ユースリーダーの社会的な責任感を育て、その学びから義務を果たすことについて学ぶ
- 4) 様々な活動から互いの文化、経験を分かち合う機会を得る。
- 5) バンコックでのスラムや孤児院を見る中で、社会のひずみを感じ、国際社会での責務を考える。

3. 参加者

日本（神戸YMCA）：6名と引率1名

竹田真由美（三宮L）・藤原友里（西神戸L）・木村佳恵（西神戸L）

福岡敦美（西神戸L）・谷掛由香（三田L）・鍵本創（国際L）・谷川尚（西宮職員）

タイ（チェンマイYMCA）：9名

タイからはユースボランティアと一般公募のメンバーで大学生が中心

アメリカ（シアトルYMCA）：9名

シアトルは社会人や大学院生など若干年齢が高いメンバーが中心、全員が職員もしくはボランティアとしてYMCAに関わっている

ラオス：2名

ラオスメンバーは、国際協力募金などで、キャンプに招致

- パ・モーン村現地運営スタッフ

チェンマイYMCA サオヒンランチより職員4名を中心とし、10名以上のボランティアで運営（過去参加者やサオヒンスタッフ）

- パ・モーン村ホームステイ

今回は10家族の家に、各YMCAキャンパーが分かれて下宿、7日間お世話になった。

- バンコックYMCA

国際部門職員と横浜YMCA 出向の職員（日本人）の計2名

（タイ・アメリカ・ラオスメンバーは3/14-24の「23thYouthWorkCamp」に参加、同行）

4. 活動概要

| 月 日 | 内 容 |
|----------------|--|
| 3 / 1 4 (火) | 午前) 関西国際空港出発 (タイ航空) 午後) バンコク経由 夜) チェンマイ到着、チェンマイYMCAへ <チェンマイYMCAホテル泊> |
| 3 / 1 5 (水) | 午前) オリエンテーション 午後) ドイステーブ寺院見学、サオヒンYMCA活動紹介 夜) ウエルカムパーティ <チェンマイYMCAホテル泊> |
| 3 / 1 6 (木) | 午前) チェンマイ県パ・モーン村へ出発 ~道中「ドイ・インタノン国立公園」見学 (滝など) 午後) ピヨムルリ・パ・モーン小学校到着、歓迎式、ワーク開会式、 ホストファミリーとの対面 夜) ホストファミリーと夕食 <ホームステイ> |
| 3 / 1 7 (金) | 午前) ワーク 午後) ワーク 夜) ホストファミリーと夕食 <ホームステイ> |
| 3 / 1 8 (土) | 午前) ワーク 午後) ワーク 夜) ホストファミリーと夕食 <ホームステイ> |
| 3 / 1 9 (日) | 午前) ワーク 日本・ラオス料理紹介 午後) ワーク 夜) ホストファミリーと夕食 <ホームステイ> |
| 3 / 2 0 (月) | 午前) ワーク アメリカ料理紹介 午後) ワーク 学校生徒との交流 / スポーツ 夜) ホストファミリーと夕食 <ホームステイ> |
| 3 / 2 1 (火) | 午前) ワーク 午後) ワーク 夜) ホストファミリーと夕食 <ホームステイ> |
| 3 / 2 2 (水) | 午前) ワーク完成に向けて 午後) フェアウエルパーティ準備 夜) ワーク完成式、フェアウエル・サンクスパーティ <ホームステイ> |
| 3 / 2 3 (木) | 午前) チェンマイYMCAへ移動 午後) ~道中~ インタノン山、象キャンプ、川下りなど 夜) ナイトバザール見学 <チェンマイYMCAホテル泊> |
| 3 / 2 4 (金) | 午前) 神戸コース 空路バンコクへ移動 午後) フィールドスタディ スラム他見学 夜) フィールドスタディ パッポンストリート見学 <パレス・ホテル泊> |
| 3 / 2 5 (土) | 午前) フィールドスタディ 児童擁護施設見学 午後) フリータイム (都市部のショッピングストア) 夜) バンコク国際空港出発 <機中泊> |
| 3 / 2 6 (日) | 早朝) 関西国際空港到着、解散 |

タイワークキャンプで出会ったこと

神戸 YMCA 職員 谷川 尚

タイワークキャンプの歴史については第 20 回報告書において、遠藤氏が以下のように触れている。(以下抜粋)「1969 年、今井 鎮雄総主事(当時、現顧問)がノッティングムで行われた世界 YMCA 同盟大会においてバンコク YMCA の若きスタッフ、ワラキット氏(元チェンマイ YMCA 総主事)に出会い、チェンマイ YMCA 創立への熱き意気込みを聞いて心打たれ支援を約したことが、両 YMCA の 30 有余年にわたる交流の発端です。その後、スタッフの相互訪問、交流が続き、それらが今井総主事退任の年、1984 年に第 1 回のタイワークキャンプへと結実します。

当時、まだ経済成長の波が届かないタイの農村には、電気もガスも水道もなく、薪で炊いたご飯をローソクの灯火で食べた、と記されています。そうした農村にホームステイしてのワークが、当時の日本人キャンパーたちにとって、まさに驚きの連続であったことは、想像に難くありません。(以上)

上記のようなスタートを切り、今回で 23 回を数えることとなりました。タイの経済成長は著しいものがあり、それに伴った様々な問題が都市のみならず、農村にも押し寄せています。今回のワーク地では、ガスはなく、電気は地区によってはソーラー発電(蛍光灯やテレビのみ使用可)のみ、水道は山のわき水をつかっていますが、経済的に時流に乗った家庭では、ピックアップトラック(もっとも舗装路がないため 4wd 以外の車は使えない)、大型テレビ、DVD、全自動洗濯機、等がある家から、いりり煮炊きをするという昔ながらの暮ら

しを続けている家まで様々でした。ただ携帯電話は村の中ではどこでも使え、街灯の明かり一つないのに、子どもが携帯で話しているという不思議な光景を見ました。

今、タイで起こっている問題はかつて、そして今日本で起こっていたものと多くが重なります。しかしはるかに日本が歩んだ歴史よりは速いスピードでタイは近代化が進んでいます。

その速さに取り残されている人たちが都市部にも農村にも多くいます。そういった多くのひずみを抱えた現状で、タイの YMCA が力を入れているのは「教育」でした。

電気の正しい使い方を教え、エネルギーが生み出されるメカニズムを教え、自然の大切さを伝えようとしていました。そしてそういった知識はまさしく、生活に密着し、現に生活を公害などに脅かされているタイの人々には、今まさに必要な「教育」であると思いました。

また農村と都市部とのギャップの大きさにも驚きました。性産業が大きなマーケットだということを知り、誰も望んで性産業に関わっていない、貧しさ故に、大きな欲望が広がる文化との出会いで売られていく子どもたちがある現状を聞き、村で出会ったあの子たちがこういった世界に吸い込まれるかもしれない状況があると感じたとき、居ても立っても居られない！私は何をすればいいのだろう！と話す参加者も居ました。

第 23 回タイワークキャンプを成功裡に導いてくださったチェンマイ YMCA・バンコク YMCA の皆さんと神戸 YMCA 関係者の皆さんに、心からの感謝を申し上げます。

(第 23 回タイワークキャンプ引率)

日記編

3月14日(火)

9時10分に関西国際空港に集合し、日本人キャンパー6名とディレクター1名は遠藤さんとマイチケットの方に見送られて旅立った。11時20分離陸。機内では興奮冷めやまない私たちキャンパーは窓の外を見てははしゃぎ、機内食を見てははしゃいでいた。徐々に興奮も冷めると、タイ語の勉強を始める者、習いたての簡単なタイ語を話し始める者など、それぞれが期待と不安を抱きながら機内で過ごした。



バンコクに到着。チェンマイ行き便に乗り換えて飛ぶこと1時間、あっという間にチェンマイ到着。それぞれにチェックが済み、空港の外に出ると、タイ人キャンパーのあつたかーい歓迎が待っていた。タイ人キャンパーはみんなすごく元気いっぱい。私たちに良い香りのするかわいい花の首飾りをくれた。そして心配していた言葉の問題ですが、日本語を勉強しているタイ人キャンパーも何人かおり、言葉の不安も少しなくなり安心した。こうやってタイ人キャンパーの温かい歓迎のおかげで不安は吹っ飛びこれからのタイでの生活がますます楽しみになった。

チェンマイY M C Aに到着。ひとまず各部屋に荷物を置き、一休みした後、タイ人キャンパーやアメリカ人キャンパー、ラオスキャン

パー、スタッフそしてO B / O Gの日本人キャンパーと食事を取り、今日は終了。ドキドキしながら食べたタイでの初めての食事はおいしかった。タイ料理っておいしいかもっ！（YUKA記）

3月15日(水)

起床。昨日はみんな疲れて早めに寝たので、だいぶ元気になったみたい。朝食を食べてオリエンテーション。いろんな方のあいさつがタイ語と英語で進んでいくので日本人にはちょっときつい。日本人キャンパーも神戸Y M C Aについて英語で説明。そしてみんなでゲームや自己紹介を楽しんだ。言葉はそんなに大切じゃない。みんな笑顔で楽しんでいて良かった。みんなの名前を覚えるのは大変だけど早く覚えよう。

昼食を食べてドイステープ寺院へ出発。かなりの山道を車でのぼって到着。そこから階段が500段くらいあつただろう。日本のメンバーは写真を撮りまくったり、アメリカのメンバーと1番上まで競争したりとだいぶはしゃいだ。寺院はとても大きくこの国における仏教の大切さを感じた。日本とは全然違う。これからのキャンプが良いものになるようにと、タイの人々と同じように祈らせてもらった。そこからサオヒンY M C Aへ移動。そこは珍しいY M C Aだった。環境問題に積極的に取り組んでいて、様々な展示物があり、子供にも分かりやすいようにしてあつた。その地その地のY M C Aが個性を持っていてとてもおもしろい。そこで平和についてみんなですっかい布にメッセージや絵を描いた。これがこれからのぼくたちのキャンプのシンボルとなった。

チェンマイY M C Aに戻り、いよいよウェルカムパーティー！ 人が多い。みんなきれ

いな格好。平和についてのスピーチは僕が担当。パーティの直前に言われ本当に大変だったし、途中セリフを忘れてしまったがなんとか形になって良かった。各国の出し物はどれもすばらしかった。日本は習字を見せて名前を紹介し、歌を歌った。終盤になるにつれてどんどん盛り上がった。特に印象的だったのはタイキャンパーの踊り。衣装が綺麗でむっちゃかっこよかった！以前のワークキャンプに参加した人とかも集まっていて素敵だった。僕たちもこうして戻ってくるのかな？とても温かい雰囲気ですべては終わった。明日からのキャンプをとて楽しみにになった。(Soh記)



3月16日(木)

チェンマイYMCAから、いよいよパモーン村へ。言葉が通じない不安を胸に出発。道中で、ドイインタノン国立公園のワチラサーンの滝へ。滝はとても大きく、流れも速く、マイナスイオンがいっぱいで開放的。心の底から癒された。

ワーク地の小学校へ到着。民族衣装を着た子どもたち約150人に大歓迎を受けた。

歓迎してくれる人々の笑顔に感動した。歓迎式では、女の子がタイの踊り、男の子が竹の剣の格闘技を披露してくれた。

ホストファミリーの家は高床式で、段々畑の広がる大自然の中、牛・豚・鶏・犬・猫と

共生する生活。お風呂はなく、水シャワーのみ。トイレも桶で水を流す。しかしリビングにはテレビと携帯電話…。キッチンでは、母が薪をくべ、料理をする。村での初夕飯のメニューは、【ご飯・卵焼き・少し辛い香菜のスープ・豚の皮焼き】。ドキドキしながら食べたけれど、とても美味しかった。



今日見るものすべてが新鮮で、戸惑いもあったけれど、キャンパーやホストファミリーのあたたかさを肌で感じた。だからこれからの村での生活やワークを、周りのみんなと協力し、コミュニケーションをし、仲良く楽しくやろうという気持ちになれた。(Yuri記)

3月17日(金)

今日は学校で初めて学校でワークをした。タイ、日本、シアトルのキャンパーみんなで協力して木をサンドペーパーで磨いたり、石や木屑を運んだりした。みんな言葉はあまり通じなくても、大まかな作業を理解して、一つのことをすることができるのだと感じた。休憩時には、子ども達と遊んでいた。言葉は通じなくても、歌などで共有できてとても楽しかった。女の子はゴム跳びや長縄、男の子はセパタクローをしていた。みんなすごく元気だった。それに、怖いもの知らずで、何にでも挑戦していた。また、日本語も少し覚えてくれた。



作業が終わった後、キャンパー達と近くの川に泳ぎに行った。ジャングルみたいな川で、そこでも子ども達は元気そうに遊んでいた。みんなずぶ濡れになって帰った。

夕食の時、ホストの子ども達に日本からのお土産をあげた。お菓子もだるま落としもどちらもとても喜んでくれた。シアトルの子がジェンガーやトランプを持ってきてくれていたので、タイの子と一緒に遊んだ。

食事の後、おばあちゃんが来て、一緒にお酒を飲んだり、カレン語を教えてもらったりした。他のキャンパーたちも来て、とてもにぎやかな夜だった。(Yoshie 記)

3月18日(土)

ワーク3日目、村の生活にも慣れてきた。この日はやっとワークらしいワークをした。

コンクリートを作るため、バケツリレーで土を運んだ。タイ語で今何杯目のバケツかをカウントしたり、日本語で掛け声をかけ合ったり、「重い」「軽い」など簡単なタイ語の講座をしたりと、重い土運びも「もう終わり!？」と思うくらい楽しい時間となった。他にも運んできた砂利や土を敷きつめたり、コンクリートを練ったり、脱穀機を設置したりとそれぞれに汗を流した。



ワーク終了後、村で結婚式があると聞き、畑と田んぼばかりのでこぼこ道をみんなで歩くこと30分。結婚式のある家にやっと到着!!そして招待されてもいないのになぜかご飯をいただき、あとはひたすら式が始まるのを今か今かと待ち続けた。しかし、花嫁と花婿は一向に現れず、だんだんおじさんたちの酒飲み場と化していってしまったため、しぶしぶみんなは花嫁と花婿を見ないまま帰宅することに。一体あの結婚式はなんだったんだろう…。そして、結局村の結婚式ってどんなものなんだろう…。

疑問が残る1日でした。(Mayumi 記)

3月19日(日)

村に来て4日目。ワークが始まって3日目。村の生活にもワークにも慣れてきて、村の子ども達とキャンパー達と小学校まで歩くことが日常になってきた。

この日は、昼食に日本料理をもてなす日であった。私たちは、天ぷらと白玉とお茶を作るため、現地の食材を分けていただき、料理する。白玉は、あんこ・きなこ・みたらし・青のりの4種類。タイキャンパー、シアトルキャンパーともにきなこが大人気だった。醤油の濃いみたらしは、合わなかったようだ。



日本の料理を食べてもらっておいしいと言ってくれるだけで、うれしく思い、少しでも日本を知ってもらえたこと、興味をもってくれたことに、幸せを感じた。昼食後は、セメント作り。砂や石をバケツリレーで数えながら運ぶ。ただ数えてるだけなのに何だか楽しい。言葉はないけど表情だけで、分かりあえてる気さえした。

この日は作業が早く終わったので、キャンパーのホームステイを回る。小学校からすぐ近くの子や、長くてきつい坂の上に家がある子もいて、それぞれ違うところで生活してるんだなって実感する。(ATUMI記)

3月20日(月)

朝食は近所の子供も一緒だった。そして一緒に歩いて登校。遠いがだいぶ慣れてきたし、子供が一緒に楽しい。到着していつも通りワークのはずが今日はあまりやることがないらしい。日本人キャンパーは1人だけ黙々と手伝っていたが、他の日本人メンバーはそれぞれ子供と遊んだ。今日は月曜日ってことで土日に比べ子供が大勢来ていた。僕は日本から持って行ったボールでサッカーの試合をした。身振り手振りで試合をやりたいことが伝わって嬉しかった。だいぶ子供の名前も覚えてきたし、子供もなついてくるようになってみんな楽しそう。やっぱりどこに行ってもみんな子供が好きだ。そして、何言っている

か分からないぶん余計かわいく見えるのだろう。悪口も聞こえないし。

昼食はアメリカのメンバーが作ったサンドイッチ。BLT(ベーコン、レタス、トマト)とピーナッツ&ジャム。両方むっちゃおいしくて大人気!昨日の日本食といい今日のサンドイッチといいやはり日本人が慣れているものに箸をのばす自分を感じた。昼からはセメントをこねた。みんなだいぶ慣れてきてスムーズに役割を分担しパワーのいるところは男がやり、手が空いている人はタイキャンパーの洗い物を手伝ったり子供と遊んだりした。ここでは指示を待つのではなく自分から積極的に動くことが大事だ。

今日は作業が早めに終わり子供たちと運動会。4チームに分かれて応援合戦したりいろんな競技をしてかなり盛り上がった。応援することによってみんなが参加できて良かった。

最初の早食い競争は明らかに食べさせすぎ。子供たちがかわいそうだったが、あの必死さはすばらしかった。端のほうではタイの音楽隊が結成されていた。メンバーはピシャ、ブイ、エイ、ヨー。そして踊りだすタイの女の子。なんかあの雰囲気良かった。みんな明らかに疲れてきてるけどそれを吹き飛ばす運動会だった。



そしてみなステイ先に帰宅。思い思いの夜を過ごす。僕は今日も帰ったら近所の子供が

5, 6人いたのでトランプとかけん玉とかで遊んでいました。日本の駄菓子はかなり好評。こんな夜のまったりとした時間も僕は好きだな。(Soh 記)

3月21日(火)

今日もいつも通り朝起きてご飯を2杯食べて、おなかいっぱいになったところで村の子ども達とキャンパーと一緒に学校へ行く。“The Cultural and Educational Development Center”は、もうほぼ完成。着々と近づく完成が待ち遠しく思えた。今日のワークはいろいろ。たとえば、

- ・ 2階のある一部(ベランダかな)のセメント流し、そのための太い針金巻き
- ・ 脱穀機を立てるための穴掘り作業
- ・ 壁塗り(コーティング)
- ・ 階段後半部作成作業
- ・ くずや木片集め
- ・ 黒いコーティングされた木にタイ語、英語、日本語で1本ずつメッセージボードを書く作業

メッセージボードは文字(英語・日本語・タイ語)の違いはあるが同じ思いが込められたメッセージをそれぞれ書こう、ということになり、まずシアトルキャンパーが考えてきたアフリカのことわざを引用したものが書かれた。“It takes a village to raise a child”。このメッセージにどんな意味が込められているのか、シアトルキャンパーに詳しく聞き、日本人キャンパーで同じような思いになるようなメッセージを考えた。なかなかしっくりくる言葉が浮かばなくて悩んだが、みんなで意見を出し合い、ついに「共に生き、共に育み、かがやくいのち」に決まった。決まったら早速、板に書き込み。何人かで手分けして何回も何回も重ね塗りをした。

塗っていると子ども達が興味を持ったらしく少し手伝ってくれた。いつの間にか塗り筆で腕や手に絵や文字を描いて遊びになった。とっても楽しいひと時。遊んでいる分作業は長引いた…。



今日は最後の追いこみのようでワークはいつもより長めだった。(YUKA 記)

3月22日(水)

朝学校に行くと、子どもたちが日本人キャンパーを見つけるなり、『おはよう』と言ってくれるようになった。子どもたちとの心の距離も縮まり嬉しい。

今日のワークは、建物のペンキ塗りの続きや、玄関の道作り。キャンパーや大工さん、ボランティア、学校の子どもたち...みんなの協力と頑張りによって、ついに、文化教育開発センターが完成。



フェアウェルパーティーは、みんなカレンの民族衣装をまとい集合。

開会セレモニーでは、チェンマイ県の教育

長や校長先生からお話があり、サプライズ花火によってパーティースタート。

ショーでは、各国の踊りや歌をみんなで楽しんだ。日本人キャンパーは、日本のファッションショー・マツケンサンバ・キャンブソングメドレーを披露。大成功。

村での最後の夜を、誰もが心から楽しみ、隣の仲間と笑いあい、同じ時間を共有できた瞬間だった。もう言葉や文化が違うことは、私達には関係なかった。

『またタイに来たときは、我が家に泊まりなさい。』と、笑顔で言う父の言葉に、涙がにじんだ。ありがとう。ほんとうにありがとう。(Yuri記)

3月23日(木)

今日はホストやパモン村とのお別れの日…。いろんなたくさんの人と出会えるのはとてもうれしいけど、出会いがあれば別れもあるというのがつらいと思った。ホストのお父さんもお母さんもとてもやさしくしてくれ、これから一緒に生活できないというのがすごく悲しかった。みんな涙が止まらないでいた。

ホストと別れた後、インタノン山に登った。この山は、タイで最も高い山であるらしく、標高3千メートル強だという。少し空気が薄かった。

昼食の後、象に乗った。たくさんの象の中に、時々赤ちゃん象もいて、とてもかわかった。コースの途中で時々バナナを売っていたので、そこでバナナを買い、象にあげたりもした。象使いの言うことをすぐ聞く象もいれば、そうでない象もいた。コースが長かったなので、たっぷり楽しめた。

象に乗った後、川で遊んだ。泳げるくらいの深さで、みんなびしょびしょになった。そ

の後、別の川に行っていかに下りをした。暑さがひいてとても気持ちよかった。時々流れが激しいところがあり、結構スリリングだった。1時間もいかに乗れて、とても満足した。



夜には、ナイトバザールへ行き、そこでお土産の買い物をした。23時まで店が営業していて、夜の町だな、と感じた。ナイトバザールの近くにはマクドナルドやスターバックスなど、日本に馴染みのあるものが多かった。ナイトバザールでは、値段がとても安いことに驚いた。その上値切れるのが当たり前だというのが日本と違うと思った。店の人は、とても日本語がうまかった。

ナイトバザールから帰るとき、初めててくてくというタイのタクシーに乗った。日本のタクシーよりたくさん人が乗れる、というのが便利だと思った。(Yoshie記)

3月24日(金)

朝、共に7日間を過ごしたタイ・シアトルのキャンパーとのお別れの朝がやってきた。

空港で涙を流し抱き合いながらのさよなら。このキャンプで初めて出会って、言葉も文化も習慣も違う4カ国のキャンパーがたった7日間でもここまで心が通い合うことができたということは本当にスゴイことだなあと思った！！涙を拭いて「必ずまたタイに帰ってくるよ！」と手を振り、飛行機に乗ること約

1時間。チェンマイからバンコクへ！！



空港で出迎えてくれたのはピオイさんとともみさん。(バンコクで2日間お世話になりました。)

バンコクではまず、ピオイさんにバンコクの現状やスラムについて話を聞き、タイの代表的なスラムであるクロントイ地区のスラムと、その傍にあるドゥアン・プラティーブ財団という施設を見学した。テレビや扇風機などはあるものの、狭い家と家とが密集して建ち並び、ジメツとした空気が流れ、あまり衛生的とはいえないようなこの街も、タイでは改善された模範的なスラムとされている。事前研修などでも話は聞いていたが、現実を目の当たりにして受ける衝撃はとて大きく、考えさせられるものだった。ドゥアン・プラティーブ財団ではそんなスラムにもっと人間らしい教育を！と、今以上に環境の悪かった1970年代から、開発教育・スラムの開発・健康管理・救急などあらゆる分野において力を注ぎ、住民のニーズに応じた対応(教育・電気・下水など)をしてきたことを知った。また、2005年におきた大津波で被害を受けた地域にも子どもから高齢者、失業者に対するあらゆる支援・援助・ケアをしていることを知り、私達にできること・相手が望んでいることはどんなことだろうと考えさせられた。

そして、夜はパッポンストリートへ。飛び

交う日本語の多さと、この不正行為に警察も関与しているためなかなか取り締まれないということ、またそのために日に日に傷つく女性が増えていっているという悲しい現実を知り、みんながショックを受けた。(Mayumi記)

3月25日(土)～26日(日)

タイで過ごす最後の日。

この日は、生活が貧しくて栄養が欠如し命が危険な子ども、両親がいなくて孤児の子ども、生活が貧しくて育てることが困難で預けられた子ども、虐待されていた子ども、売春をしていて保護された子どもなど、いろんな背景をもった子ども達が生活をしている児童養護施設を訪問した。この施設は0～6歳児対象で、ある程度年齢別に分かれて生活している。一人ひとりの子どもに見合った援助ができるようにと人数には制限がある。家族のように生活し、お互いに助け合い、愛し愛されて、生きる力を育む。日本の施設と似てるところも多いが、子どもの背景は暗くて重いと感じる。



その後市場に行き、日本でいうファミレスで昼食をとる。土曜日ということもあり家族ずれがたくさんだった。中学生くらいの子が従業員として働いていた。

昼食後、再び車で移動し、日本でいうと大阪にあるヘップのようなファッションビルでフリータイム。それぞれお土産を購入するな

どし、最後のタイを満喫する。

帰りは、電車と地下鉄を乗り継ぎバンコクYMCAへと向かう。電車の切符はカードで使い回し。地下鉄は黒いオセロのような丸いチップ。地下鉄を降りてからは、暗くて危険な道を通った。少し道を外しただけで空気と雰囲気が変わる。

バンコクYMCAに着き、車で空港へと向かう。もうタイともお別れ。搭乗までそれぞれ時間を過ごす。24時半頃、いつもの如く約30分遅れでバンコク離陸。

26日朝7時過ぎ、関西国際空港到着。日本のまだ冷たい空気に触れ帰ってきたことを実感。みんな無事に元気に帰国した。



物ではかえれない多くのものを感じて学んだ2週間。出会った全ての人に出来事に感謝するばかりだ。

Thank you.

コップンマーカー

ありがとう(ATUMI記)

神戸からチェンマイへ ...タイワークキャンプ後の交流

これまで23回続けられてきた「タイワークキャンプ」にはこれまで多数の参加者がいます。その多くはYMCAのユースリーダーですが、一般の参加者もあり、参加後それぞれの人生を歩んでいます。このキャンプにより多かれ少なかれ人生が変わったキャンパーもいます。日記にあったように、ワークキャンプのオープニングセレモニー(ウェルカムパーティー)に、来てくれる過去参加者もいれば、自分で自分のワーク地に里帰りする人、中にはタイに住み着き結婚した人まで...

人生を変えただけでなく、自分たちのできることをやっといこうと今でも結びついている集まりもあります。「チェンマイマニア」は10年以上前のキャンパーの有志が中心になって集まり、古着を集め、フリーマーケットで売ったお金を交流のために寄付したり、チェンマイ近郊の村にチェンマイYMCAを通じて古着を寄贈したりと、活動を行っています。毎回のキャンプの度に、キャンパー1名につき10kgほどの鞆いっぱい古着を託されます。今年もパ・モーン村に、遙か遠い神戸から古着がたくさん寄付されました。子どもたちは照れながらもらって、こっそりもらった服のファッションショーをしていました。中には5枚上着をもらって、そのあと全部重ねて来ている子も...



ワークキャンプを振り返って

(参加者感想)

『感想』

このタイワークキャンプに参加し、日本について知りたいと思うようになりました。

初めは自分のことではいっばいいいばいででした。アメリカ人やラオス人、タイ人に積極的に話しかける他の日本人キャンパーを見て、話しかけるのをためらっている自分に情けなくなりました。そんなこんな考えてるうちに村到着。村について初めてであった村人は小学校に通う子どもたちでした。民族衣装を着てお花を持って、照れながら私たちキャンパーの手を引っぱって学校まで連れて行ってくれました。子どもたちの歓迎に感激して泣いてしまいそうでした。

村では、ホームステイ生活。毎日、子どもたちと歌ったり遊んだりしながら田んぼ道を学校まで歩いて通いました。学校では文化センターを建てる作業に取り組みました。村の方(大工?)とキャンパーとスタッフが協力し合い週間で完成しました。始めは私にとって、このキャンプは文化センターを完成させることが目的だと考えていました。でも、徐々にこのキャンプの目的はこの作業を通しての「協力と分かち合い」という4カ国(5民族?)の交流だったのかなと今では思います。

バンコクではスラム街の子どもが多く通う施設や様々な問題を抱えたここも経ちのケア施設、街中など見学しました。タイといっても一部しか見ていませんが今後の社会的問題、課題は多いように思われました。そしてどの経験を通して「じゃあ、いったい日本はどうなんだろう。同じような問題や課題はないのか。」という疑問がわきおこりました。今

まで考えもしなかったのですが、キャンプに参加して日本はどうなのかという疑問を感じました。こうやって日本の問題に目を向けることに気づかせてくれたキャンプでした。めちゃめちゃ良い経験になりました。

(谷掛由香：三田YMCAリーダー)

『時計のない生活』

僕はこのキャンプに時計を忘れた。最初はそのことを非常に後悔し、現地で買おうかと考えていた。しかし、村に入り生活してみると時計なんて必要ないことに気付いた。朝はにわたりの鳴き声が目覚まし代わりとなり、夜は暗くなったら寝る。集合時間は決めるが、だいたいそのくらいに行けば良い。ご飯はお腹がすいたら食べる。なんてのどかですばらしいのだろう。そこで初めて気付く。日本でどれだけ自分が時計を気にしていたかということ。電車の時間に合わせ動き、テレビの番組表に合わせ動き、授業の始まりから逆算して起床時間を決め、全ての行動は時間に基づいてなされていたように思う。この村に来るとそんな日本の自分はちっぽけだったなあと感じる。そしてこの村のもう1つのすばらしいところは、支え合いの精神である。採れた食べ物は分け合ったり、テレビのある家は開放したりと近所が一体となっている。その中で子供を村全体で育てる「共に育む」という理想が実践されていたように思える。これに対して日本はどうだろう。核家族が分離し、近所との関係を持つとしない傾向が強まっている。隣に住む人の名前も知らないということが珍しくない。親が子供を育てるのはもちろんだが、周りからの幅広い支えがあって、子供はより健やかに育っていくのではないか。こうして全てを単純に村と日本で比較してしまうのは良くない。しか

し、村の生活は日本をはじめ豊かと言われる国々の生活の足りない部分を示しているように思う。このような視点から考えられるようになったことをはじめ、1週間という短い期間でいろいろなことに気付かされ考えさせられた。そういう意味で多くのものをこのパモン村や彼らからもらった。逆に僕たちは1週間で何を彼らに与えられたのだろう。何ができたのだろう。立派なカルチャーセンターの完成には役立てた。子供に日本語、日本の歌、日本の遊びを教えた。ホストファミリーと楽しい時間を過ごした。これらは全て一時的なものだ。これを継続的なものにするために何ができるだろう。これからこの経験を多くの人に伝えること、この経験をきっかけに学び、行動を起こしていくこと、この経験が自分の心の中にいつまでも残りこれからの人生に影響を与えていくこと、が僕たちが彼らのためにできることだろう。

最後に、このキャンプで出会ったすべての人へ。ありがとう。

(鍵本 創：国際・三宮サッカーリーダー)

『感想』

まず、第23回タイワークキャンプの、一キャンパーとして参加させていただけたことに深く感謝します。ありがとうございました。

今回は、山岳民族であるカレン族の村、チェンマイ県チョームトーン郡のパモンと呼ばれる小さな村を訪れました。そして、村の小学校に、衰退しつつあるカレンの文化を残すため、また村の生徒や村人がカレン族の伝統的な文化を学ぶことのできる施設、一件の高床式の家を建てました。タイ・シアトル・

ラオス・日本のスタッフ、キャンパー、そして村の人々や子どもと協力して取り組みました。

私がこのタイワークに参加した動機というのは、タイという国に触れ、自分はどのように適応し、行動するのかと、いろんな意味で、自分という人間を見つめ直すきっかけになればと思い参加しました。タイ語はもちろん英語もできないので不安な点も多くあったのですが、その壁に自分はどのように向き合えるかも挑戦してみたかったです。

タイという国は、いろんな意味で大きい国でした。そのため自分なんてちっぽけに思えて、客観的に自分をみることができました。そしてものには決してかえることができないものを得ることができました。それは、このキャンプを一緒に創りあげていった、タイ・シアトル・ラオス・日本のキャンパーやスタッフ、そして暖かく私達を受け入れてくれた村の人々やいつも無邪気な子どもたちとの出会いです。コミュニケーションは言葉だけでなくもできるのだと実感し、自分はかけがえない出会いの中に存在しているのだと気づき、それがとても心地よく幸せでした。

振り返れば、逃げていたことも多くあり、何であの時もっと自分の気持ちを強く伝えることができなかつたかと思うこともあります。これがきっと自分の弱く、醜い部分なのです。隠そうとすればできるけど、それではいけないのだと、こんな弱い自分とも向き合わないといけないのだと痛感しました。そして自分なりにいろんな場面で出してきました。100%出し切ったかといえば出し切れていないです。しかし、これで終わりではなく、始まりだと信じているので、これからの私の目標としてこれからの活動に生かしていくつもりです。

私が事前研修で調べていたことは”タイの

子どもの生活”でした。

やはり子どもの生活には興味があり、自然と子どもと接していました。村の子どもは、人見知りが激しくシャイで、素直でした。でも、時間をかけていくうちに距離も縮まり、暖かい笑顔も見せてくれるようになりました。村全体で子どもを育てているように村人は子どもを愛していて、子どもも村全体が家であり、遊び場であるように暮らしていた。子どもたちの目は、欲がなく真っ直ぐであった。教育的に言えば、不十分な点も多く、男の子が進学したいならばお坊さんになり勉強するとその資格を得ることができるようだ。女の子は、進学にはほとんど恵まれず、よっぽどの裕福な家庭でないとないに等しいようです。

バンコクのスラムは、はっきり言って子どもにとって悪い環境でした。以前よりは、家々をつなぐ渡り廊下も、板きれを渡しただけのものが、コンクリート造りになり、水道なども徐々に整備せれてきているようです。衣類や家具などは、村よりは多くあるように感じたけど、人が生活するには、つらい環境でした。村の子どものほうが、子どもらしくのびのび暮らしているように見え、村の子どもが明るいとすれば、スラムの子どもは暗く冷たく感じました。しかしスラムの子どもにすればそこが居場所で、その生活が彼らの日常なのです。

都会では経済的に発展していく中で、物価高の問題が襲い、精神的な面での重圧ものしかかっているのです。心のゆとりも失われているように見え、そのしわ寄せがスラムに住む子どもの身に及んできているのかと思うとタイという国に疑問を感じてしまいました。いろんな取り組みや活動がなされているけど現在もなお物乞いをしている人達を見ると、経済の発展よりも、もっと大切なものが失わ

れているようで、子どもたちは笑っているが、その裏の孤独感が見えそうでした。子ども達がずっと笑って暮らせるように、できることがまだまだあるはずです。どんな形でも、探していけるように、これからもタイという国と関わっていきたいと思いました。

この2週間、感じたこと考えたことは、これからの私の人生に大きく影響するでしょう。

このキャンプに出会えたことに感謝します。ありがとうございました。

(福岡敦美：西神戸YMCAリーダー)

『隣の人の笑顔のために』

『サワッディーカー』と、チェンマイ空港で、タイキャンパーたちの大歓迎を受け、第23回タイワークキャンプが始まった。そこには数え切れない素敵な出会いと、人々の温かさ、そして感動があった。

その中でも、一番印象に残っているのは、『マイペンライ』という言葉。日本語で「大丈夫」という意味。タイ人はこの言葉を良く使う。ワークで疲れた私に、すかさず「マイペンライ?」、言葉が理解できなかった私に、笑顔で「マイペンライ!」。どんなときも私を責めず、私を気遣いかけてくれる言葉。

キャンプも半分を過ぎたある日のワーク後、ふと目の前に広がる大自然を眺めながらキャンプを振り返っていると、出会った人々の優しさや自然と溢れる笑顔、他人と通じ合えたときの嬉しさに感動すると同時に、自分の無力さや小ささに気付き、涙となってこぼれた。学校からの帰り道、周りにばれないように深く帽子をかぶり歩いたが、やっぱり気付かれてしまった。『ゆり、マイペンライ?』その優しさに、また涙が溢れた。他人の心に触れる。それには、言葉があれば便利かもしれな

い。しかしそれ以上に、その人を理解しようとする気持ちや行動が、言葉を超えて表れたとき、本当に相手の心に伝わるのだと思う。そしてお互いに通じ合えた瞬間、共に気持ちを分かち合えるのだと思う。

私たちは同じ『今』を生きる人間として、遠くの国のことを思いやることも確かに大事だが、まずは隣にいる『人』を大切に想う気持ちが、世界の平和に繋がっていくのではないかと思う。隣の人に、ちょっと気を配ってみる。隣の人に、ちょっと手を貸してみる。それはちょっとのことかもしれないが、きっと大きな笑顔に変わるはず。そう信じて、私はこれから隣にいる人たちと接していきたい。

最後になりましたが、出会えた人々、そして周りで支えてくださった方々に心から感謝します。貴重な経験をさせて頂き、本当に本当にありがとうございました。

(藤原友里：西神戸YMCAリーダー)

『感想』

このキャンプに来てホントによかった！！このキャンプで私は、知ること・学ぶこと・行動することについて考えさせられた。

【知ること】事前研修などでタイについて調べたり発表したりしたのはとてもよかった。私は、タイについて本当に無知だったので習慣や伝統・教育・差別問題・スラムなどタイのことや、タイの抱えている問題についても行く前に考えることが出来たし、現地でも変な先入観だけが先走ることもなかったように思う。

【学ぶこと】村の子どもととても仲良くなり、遊んでいる途中、キラキラした目と満面の笑みで私に「サヌウック？」と聞いて来た。しかし、私は聴き取ることがやっとで、意味も解らなかったのであやふやな返事しか出来ず、その子に少し気落ちさせてしまった

ことがとても悔しくて、もっとタイ語が話せれば・・・と思った。たしかに言葉がなくても気持ちは伝わる。しかし、より自分の気持ちを的確に伝えるためにはやはり言語・語学はなくてはならないものである！！

【行動すること】始め、緊張とうまく言えなかったら恥ずかしい！という思いから、なかなかシアトルのキャンパーと話すことができなかった。しかし、ある日、数人のシアトルキャンパーともう一人の日本人キャンパーとでのんびり雑談する機会があった。そこでは「マクドナルドやスターバックスは日本でなんと呼ばれているの？」というものだった。マクドナルドやスターバックスという言葉すらネイティブすぎて聴き取れず、何度も聞き直したり、ゆっくり言ってもらうなどしているうちに、コミュニケーションをとることがとても楽しくなってきたし、わかった時の「あぁ～！！そんなこと言ってたんや！」というのなぜかとても面白かった。何度も聞き直していると鬱陶しがられることもあるが、あまり深く頭で考え過ぎず、いろんな人というんな関わり方を

試してみることでコミュニケーションの輪がグッと広がると感じた。

これ以外にも発見や驚き・学びはたくさんあったし、大笑いも大泣きもたくさんした。本当に、濃過ぎるくらい濃いこの2週間のことは決して忘れません！！！！

(竹田真由美：三宮YMCAリーダー)

『タイワークの感想』

私がタイワークに行くにあたり、一番自分の目標としていたのは、村の学校にコミュニティーセンターを建てるのを頑張る、ということでした。なぜなら私は以前から、青年海外協力隊などに興味があり、外国で何か援助

をしてみたい、とっていたからです。

実際、タイのパモン村の学校に行って、約6日間コミュニティセンターを作るワークをしました。日本の3月と違ってタイは暑いので、最初は気温の差により、しんどく感じました。しかし、次第に暑さにも慣れ、バケツリレーで物を運ぶなど工夫をしてみると、作業が楽になり、進み具合も楽になりました。また、日本語、タイ語、英語でいろんな掛け声をかけながらバケツリレーをすることで、タイ語や英語をたくさん覚えることができました。さらに、バケツリレーで、『皆のコミュニティセンターを完成させたい』という気持ちが一つになったような気がしました。作業には物を運ぶことに加え、石やゴミを拾う、木を切る、木をサンドペーパーで磨く、壁をペンキで塗る、レンガを積む、などがありました。思い返してみれば、私が今までボランティアをしてきた中で、このようなことをしたことはあまりなかったな、と思いました。けれども、このような援助こそが本当のボランティアであるのではないかと実際に作業をしてみて、そう思いました。私は今まで、外国に対しての援助は募金しかしたことがなかったので、今回初めて働くことによって援助ができたことに大きな喜びを感じました。

また、パモン村の学校では、子どもたちとたくさん関わりを持つことができました。私が子ども達の遊びに入ると、子ども達は快く受け入れてくれました。そして自然と一緒に遊ぶことが出来ました。私が笑うと、子ども達はいつも笑顔で返してくれました。言葉は通じなくても、大いにコミュニケーションをとることができたと思います。特に日本の歌を歌うと、言葉は分からなくても、一緒にリズムに乗ってくれる子がいて、心は通じて

いるのだな、と感じました。また、子ども達は私の持ってきたタイ語の本に興味津々出した。何人かの子は、その本を見て、私にタイ語を教えてくれ、私は子ども達からもタイ語を学ぶことができました。さらに、ワークの終盤くらいになると、子ども達が自ら作業を手伝いに来てくれ、大いに助けられたと共に、とてもうれしかったです。村の子どもは、日本の子より、何にでも挑戦し、たくましく元気だなぁ、と思いました。

ホストファミリーとは、初め緊張して、あまりうまく関われなかったけど、徐々に話せるようになってきました。ホストのお母さんと言葉は通じなくても、私に優しくしてくれているのがとても伝わってきました。お父さんもお母さんも、私達キャンパーを本当の子どものように想ってくれました。私が腹痛で体調を崩した時も、お父さんとお母さん2人とも、とても心配してくれました。また、ホストファミリーだけでなく、一緒に生活したキャンパーとも仲良くなることができました。

私は、パモン村でのこれらの思い出を絶対に忘れません。そしてこれらの経験によって、さらに成長できたらと思います。

(木村佳恵：西神戸YMCAリーダー)

コラム集

ここでは参加者感じたことについて
テーマ別で紹介させていただきます

コラム『タイの子どもたち』

タイの村の子どもたちは、本当に可愛い。大自然の中を走り回り、段々畑を飛び越え、川で裸になって泳ぐ。日本人にも笑顔で駆け寄り、中には『おはよう』と、教えた日本語であいさつしてくれる子も。欲がなく、無邪気で、素直で...本当に可愛かった。



ある日、日本人キャンパーが、残り少ない1本のジュースを5～6人の子どもたちにあげた。すると1人が遠慮深く手を伸ばし、少し飲んで隣の子に回した。それが繰り返され、全員に回り返ってきたボトルの中には、まだジュースが残っていた。この瞬間、あの言葉がふと浮かんだ。

『奪い合えば足りない、分かち合えば余る』

子どもたちから、言葉の意味を教えてもらった。(藤原友里)

コラム『非言語コミュニケーション』

日本語、英語、タイ語、ラオス語、カレン語、そしてボディランゲージ。これらがこのキャンプ中に飛び交った言語である。スタッフの谷川さん含め日本人は英語が得意ではない。タイ語も事前研修でかじった程度だ。ホストファミリーのほとんどはカレン語し

か話せない。こんな状況の中多くの人とあれだけ仲良くなれた要因はなんだろうか。それは伝える側の伝えようとする気持ち、受け取る側の理解しようとする気持ちが非常に強かったからだ。言葉は分からなくても相手が何を言おうとしているのかわかるという奇妙な現象が何度となく起きた。そしてそんなコミュニケーションが成り立ったときどんなに心地よいかは参加した者なら誰しも分かるだろう。確かにタイ語、英語中心で戸惑うこともあった。でも大きな問題にはならなかった。なんとかなった。つまりそこには言葉よりも大事なものがあつた。お互いの分かり合おうとする気持ちがあれば通じ合える、というのを実感した。気がつけば言葉も分からないのにみんなで大笑いしている。すばらしいことだ。笑顔と熱い気持ちがあれば世界中の誰とでも友達になれる。そんな大きな可能性を感じた。(鍵本創)



コラム『貧困って?』

今回私たちが滞在した村は、山岳民族、カレン族の村。家は高床、外は段々畑の広がる大自然。牛豚鶏...家畜の代表者は、生活を共にしていた。地区によっては電気やガスは通ってなく、夜はろうそく、料理は薪で。もちろんお風呂はなく、水シャワー。その反面、近代化が徐々に浸透し、テレビや携帯、車を持つ家庭も増え、カレンの伝統が衰退してい

る現状も...しかしながら、時計もなく、毎日ゆっくりと時間が流れる。人々は、笑顔に溢れ、ご近所さんで助け合う温かい雰囲気。子どもの教育は学校を先導に、地域の人々みんなで育てていく環境。



一方、バンコクは東京をしのぐほどの大都会。高層ビルが立ち並び、アスファルトの道路は大渋滞、ヒール・ミニスカのお姉さんが足早に歩く。一見華やかな街のようだが、ふと道端に目をやると、子どもが物を売ったり、地べた座り込み、くすんだ目で物乞いするおばあさんや盲人の姿が...。言葉を失う光景。

一步道を外れると、そこにはスラム街が広がる。ひと気のない道は狭く、ぼろぼろの家が窮屈そうに立ち並ぶ。生臭いゴミだらけの生活の中に、ただテレビと扇風機だけが動き、人々の目はどことなく寂しそうで、仕事もせず暑い家の中で動く画面をボーっと眺めていた。孤児院では、あまりに早すぎる経済発展のひずみから、栄養失調、虐待、人身売買などの被害を受けた子どもが生活していた。



夜の街は、どことなく落ち着かず、黒い目が光り視線が冷たく怖い。風俗街では、日本語の看板が目立ち、日本語が飛び交う。ここはタイよね?と聞きたくなるくらい。スリから身を守り、怪しい人とは目を合わせないように歩く。

本当の貧困とは何なのか?物質的な貧困と、心の貧困。

確かに村に入ったとき、生活の変化に多少の戸惑いはあった。しかし適応すれば、自由でのどかで楽しかった。人々も温かかった。物がなくても、あまり貧しさを感じなかった。一方、物の溢れるバンコクは、お金のある人にとっては便利で快適かもしれないが、お金のない人は毎日何を思い生きているのか...あの大都市は、どこか歪んでいて、何か物足りない気がした。

村には村の、都市には都市の、そして、日本には日本の問題がたくさんあると思う。何が必要で、何を持って豊かだと言えるのか。それはタイを見て、日本の現状を見つめ直す必要もあると思う。

幸せって一体何なんやろう?漠然としてるけれど、これから考えていきたい課題です。

(藤原友里)

コラム 『村の子ども達~ in Phamorn Village ~』

私たちが、タイワークキャンプで出会った

パモーン村の子ども達。

とても恥ずかしがりで、無邪気で、欲もなく、まっすぐな目をして、笑顔にあふれていた。

出会って間もない頃は、子どもとの距離も遠く、話しかけても『誰この人たち...?』と言わんばかりの警戒した目。でも私たちに興味はあるみたい。素直な子ども達。

少しずつこちらにもオープンに関わると、子どももそれに乗ってくる。単純な子ども達。

毎朝、学校には子ども達と一緒に行く。

行きは、お母さんに言われていたのか、ちゃんとした道を歩いて行ったはずなのに、帰りは...道が違うような...?

しかもそれが、遠い。道ではなく畑のど真ん中をどんどん進んでいく。明らかに道じゃないところ子ども達にしたら、近道なのかな。

『こっちこっち!!』と言わんばかりに、私たちがついて来ているか、ちらちら後ろを見ながら歩く。優しい子ども達。

学校帰り子ども達、急に服を脱ぎだして川にジャンプ。

とても濁った、日本なら確実に泳ごうとしない川。そんなのお構いなしに泳ぐパモーン村の子ども達。

なんて自由なのだ。誰も川が汚いからと帰りが遅くなるからと、怒らない。

満足いくまで泳ぐと、濡れまま服を着る。すぐに乾くから平気なんだ、と納得する。

又、急に木に登りはじめる。木の実を採って、口に運ぶ。食べるんだ。

美味しいのかな? つたないタイ語で『ギンダーイ?(食べれるの?)』

子どもは『食べてみて』と差し出す。食べてみると甘くて美味しい。赤色の実は酸っぱいけど、紫色の実は甘い。子どもはよく知っている。村の博士のようだ。

ある日の朝、いつもと違う道、子ども達は、

私達を誘導する。

どこに行くのだろうと付いていく。

すると、畑の土のところに鳥の卵を発見。小さな小さな卵。よく見つけたねと感心する間もなく、次は畑の地面にヒナ鳥を発見。まだ目も開いていないくらいの小さなヒナ。手にとって見せてくれる。

子ども達の目はいつも何を見ているのだろう。

どんなに険しい道でも、寄り道し過ぎていても、私は子ども達と一緒に行き帰りする道が、大好きだった。幸せだった。

日本に帰って母親にパモーン村の子ども達の話をする。

『お母さんの子どもの頃は、そんな感じで遊んでたよ』と懐かしそうに母親が話す。

日本もそんな頃があったんだとしみじみ感じる。



今となっては、YMCAの野外活動のような造られた機会でない自然と触れ合えない、子ども一人では外に出られない世の中となってしまう。

自由に遊べない子ども達。

こんなことを思うと、村全体に愛されて守られて生きている村の子ども達は、かけがえない存在だ。

子どもの幸せ、子どもの笑顔こそ村の財産だ。これからも変わらないでほしいと心から思う。(福岡敦美)



神戸 Y M C A 国際・奉仕センター

〒650-0001 神戸市中央区加納町 2-7-15

TEL : 078-241-7201 FAX : 078-241-7479

E-mail : houshi@kobeymca.or.jp